

古墳時代の葬制と他界観

わだ せいご
和田 晴吾

日本列島では、初期水稻農耕社会が定着し一定の成熟をみせた段階で、数多くの古墳が造られた。われわれは、この時代を古墳時代と呼び、古代国家形成過程の途上にあたる時代として高く評価している。時期は3世紀中葉～6世紀後葉。範囲は九州から東北南部にかけての地域である。この間、人びとは熱狂的な勢いで、前方後円墳をはじめとする古墳を造りつづけた。本論の主題は、この「古墳とは何か」にある。

そこで、発掘でわかった遺物や遺構や人びとの行為をできるだけ具体的に復元し、順序立てて整理・検討した。そして、最終的には、古墳の儀礼の全体を演劇と見なし、遺構や遺物を大道具・小道具、古墳を中心とした場を舞台と捉え、行為の手順から筋書きを類推し、筋書きから基本理念に至るという方法をとった。

その結果、古墳は、死せる首長の魂が赴く他界（あの世）を、その表面に表現した「他界の擬えもの」（模造品）であるとの結論を得た。

当時の人びとは、死者の魂は船に乗って他界へと赴くと考えていたことから、その葬儀では、魂が他界へと赴く様子を模擬的に実修し、首長の遺体を実物大の飾られた船（喪船）に乗せ、他界の擬えものたる古墳へと牽引していったのである。血縁原理が優越する同族社会においては、祖先信仰（崇拜）のもと、死せる首長の冥福を祈り、その魂を無事他界へと確実に送り届けることが、何よりも重視されたからにはほかならない。古墳はこの儀礼に不可欠な舞台装置だったのである。そして、墳丘には、以下のような世界が表現された。

古墳（他界）へと無事到着した死者の魂は、入口（造出付近）で船（船形埴輪）を降り、禊ぎ（埴輪埴輪＝内部に浄水がある）をし、岩山（葺石の施された墳丘）を登って、頂上にある防御堅固（武器・武具形埴輪）で、威儀（蓋・翳形埴輪）を正した屋敷（家形埴輪）に住むようになるが、そこは飲食物（円筒埴輪＝器台、朝顔形埴輪＝器台＋壺）に充ち満ちたところで、屋敷には、日々、海の幸・山の幸（土器と食物形土製品）が供えられた。

それは、当時の人びとが思い描く豊かな不死の理想世界だった。古墳は日本で最初に死後の世界を可視化した造形物だったのである。古墳の文化史的意義はここにある。ところで、飛鳥時代に入ると前方後円墳や埴輪などは造られなくなる。支配者の他界観が古墳時代的なものから仏教的なもの（浄土信仰）へと大きく変化していったからにはほかならない。